

貧乏帝大生はどれくらいいたか？

昭和初期学生生活調査における「苦学生 2割5分説」の検証

末富 芳(福岡教育大学)

1. 問題設定

『昭和四年十月現在 東京帝国大学学生生計調査報告』(以下、東京帝大昭和4年調査)の結果公表を受けた帝国大学新聞の報道によれば「二割五分は苦学生」とされている¹⁾。

この報道の根拠となったと推定されるのは「家計ノ程度」についての設問で「父兄ヨリ學資ヲ支給シ得ル程度ニアリ」「父兄ヨリ學資ヲ支給スルニ困難ナ程度ニアリ」の2つの選択肢から回答を行う方式であった。回答総数 4439 名に対し 24.9%にあたる 1107 名が「父兄ヨリ學資ヲ支給スルニ困難ナ程度ニアリ」と回答している。

しかしながらこの質問項目のみを根拠に帝大生の 2割5分が苦学生すなわち経済的に低い水準の学生生活を送っていた者であったと結論づけることはできない。東京帝大昭和4年調査では、学生のうち 9.2%が個人的後援者もしくは給費奨学生として学資金を出資してもらっており、父兄から大学教育費を得ることが困難でも一定水準の学生生活を送っていた者がいる可能性も高い。

東京帝大昭和4年調査は居住形態や生活費についても一定の分析が可能であり、帝大生の経済生活の実態をある程度把握することができる。昭和初期の帝大生の生活状況に注目し富裕学生や貧乏学生の集団構成を把握することは学生文化研究の基礎作業として重要である。

本報告では東京帝大昭和4年調査を分析対象とし生活実態に注目して、いったい貧乏帝大生はどれくらいいたか、すなわち帝大生集団の経済生活の面からの階層構成を検証していく。

2. 先行研究の状況

さて帝大生の経済階層や生活状況を中心とした教育社会学の先行研究の状況は下記の通りである。

菊池[2003]は文部省教学局『学生生徒生活調査』(昭和13年11月)の分析から家庭からの学資を「困難」と回答した帝国大学生が 14%いることや他の高等教育機関のデータから「どの高等教育機関においても、家庭が必ずしも豊かではなく、学資の支給を期待できない学生が少数は存在していたことが確認できる」²⁾と指摘している。ただし「家庭の豊かさを示すというよりは学資自体が十分か否かをたずねているにすぎない」³⁾ことから東京帝大昭和4年調査と同様にこの設問をもって、帝国大学の苦学生が 14%存在したという根拠にはできない。

また「左傾学生貧困説」を退ける分析において竹内[2002]は、左傾帝国大学生の 12.1%の家計水準が「貧困」であったことを明らかにしている。また「帝国大学や高等学校に富裕な者が多く、高等師範学校に貧困な者が多いが、これは左傾学生の特徴とはいいがたい。前者に富裕な学生が後者に貧困な学生がおおかった(「学生生徒生活調査」によれば学資支給容易の割合は、帝大三四%、高校五一%であるときに、高師二一%)からである」と指摘している⁴⁾。ただしここでも学生の富裕度/貧困度の判定基準となっているのは学資の支給の容易度であり、集団間比較の基準としては妥当性があるものの、帝大生集団に貧乏な学生と富裕な学生がどれくらいいたのかは明らかにはされていない。

3.分析手法

本報告の分析手法について述べておく。前述したように本報告では分析対象を東京帝国大学学生課『昭和四年十月現在 東京帝国大学学生計調査報告』（東京帝大昭和4年調査）とする。回収率は全体で61.7%(4439名/7191名)、最高回収率は医学部68.2%(442名/648名)、最低回収率は農学51.2%(336名/656名)である。帝大生の過半数が回答しており、帝大生集団の経済階層分析や生活実態分析に用いても良いと判断できる。なおこの調査を帝大生の経済階層分析の起点としたのは、最終的には左傾学生文化と経済階層との関連性を分析する意図があり戦前期の学生運動が隆盛を見せた1930～1933年に近い時期の学生生活調査を扱う必要があったためである。

さて東京帝大昭和4年調査は、居住関係、居住地域、家族状況、父兄職業、学資金、趣味、娯楽等の幅広い項目についての質問から成る調査である。居住形態×学資金、父兄職業×学資金平均額といったデータが個別に提示されており、学生の居住形態と学資金との関連、出身階層と学資金等の関連等の分析が可能にある。ただし居住形態×学資金×父兄職業といったデータは示されておらず、その意味では階層分析に用いることには限界もある。

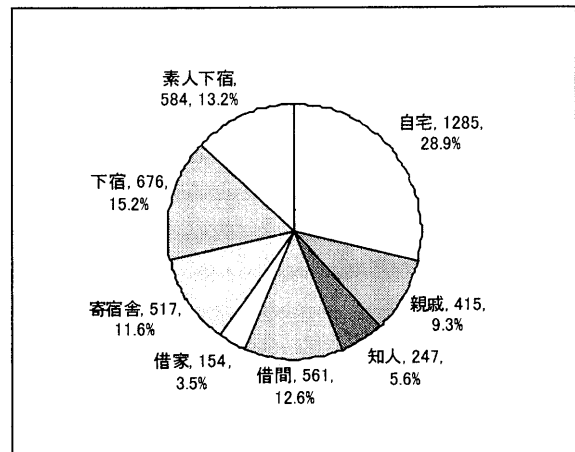
さて学生の経済生活を考える場合、「居住形態」に注目した分析が必要となる。同じ程度の学資金を受け取ってはいても、自宅生か自宅外生かによって生活水準が異なるためである。

4.貧乏帝大生はどれくらいいたか？

[1]帝大生の居住形態

まず帝大生の居住形態を把握していく。図表1に示したのが東京帝国大学生の居住形態であるが、このうち自宅・親戚・知人と回答した者を「自宅生」(43.8%,1947名)とし、借間・借家・寄宿舍・下宿・素人下宿と回答した者を「自宅外生」(56.1%,2492名)と分類した。

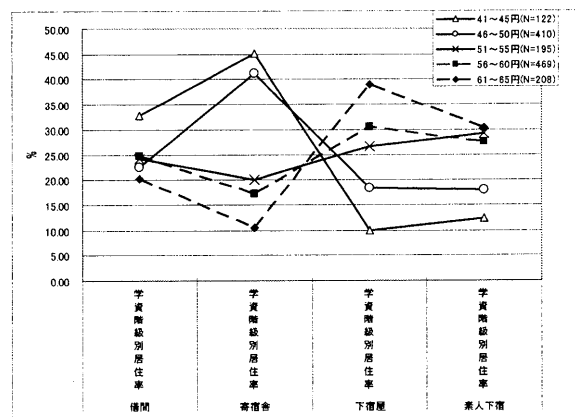
東京帝国大学生の居住形態 (N=4439) (度数,%)



[2]帝大生の学資金分布 (当日報告)

[3]自宅外生の居住形態と学資金との関係

自宅外生の居住形態と学資金との関係 (%)



[4]自宅生の居住形態と学資金との関係 (当日報告)

[5]考察：貧乏帝大生はどれくらいいたのか？

(当日報告)

主要参考文献

菊池城司,2003,『近代日本の教育機会と社会階層』東京大学出版会

竹内洋,2002,『「左傾学生」の群像』『不良・ヒーロー・左傾—教育と逸脱の社会学—』人文書院。

1 『帝国大学新聞』昭和5年5月号

2 菊池[2003],345-346頁。

3 同上345頁。

4 竹内[2002],37頁。

本報告は竹内洋研究代表「高等教育のマス化・ユニバーサル化と学生文化の変容に関する歴史社会学的研究」(平成19年度科学研究費補助金)による成果の一環です。